

「沙羅、すべり」
サラ

芳崎 洋子

〈登場人物〉

ケイ(女)

ヒロシ(男)

モモ(女)

エリリ(女)

コウ(男)

メグミ(女)

薄い茜色が、大きな砂山の上に座る二人の影を映し出す夕暮れの始まり。皮膚一枚を通して感じる相手の体温は、心地よくもあり、不快でもある。遠くを見つめているケイ。その膝の上には、アルミ製の小さな手提げ鞆。その横には、所在なげなヒロシ。その日も、砂は降っていた。

ケイ 好きやなあ、私。

ヒロシ 何が。

ケイ この景色。

ヒロシ そうか？

ケイ 見ててみ、だんだんと空の色が変わるから。お陽^ひさんが沈むのと一緒に。

ヒロシ お陽さん？

ケイ うん。…小さい頃のまんまや。

ヒロシ 何で見えんねん。

ケイ 何が。

ヒロシ お陽さんて。窓もないのに。

ケイ 見えたやん、あの頃は。

ヒロシ え。

ケイ 見えたやん、あの頃は何でも。

ヒロシ …あの頃なあ。

ケイ 良かったよなあ、あの頃…。

ヒロシ そうか？

ケイ (ヒロシを見て) 良かったやん。

ヒロシ 何が良かったん。

ケイ ぜーんぶ。

ヒロシ 全部？

ケイ うん。二人でいつつもここに来て、二人でいつつも暗くなるまで遊んで…。なんか二人だけのお城やった。

ヒロシ こんな、灰色の壁に囲まれた所が。

と、辺りに目をやるヒロシ。

そこは、古びた倉庫の中。無造作に積み重ねられた砂袋の山に、二人は座っていた。

ケイ 壁なんかなくてん、あの頃は。

ヒロシ 前からあったわ。

ケイ あつてもなかってんて。思い通りに外が見えて、思い通りに何にでもなれて、アンタも優しく、毎日が二人だけで、

ヒロシ (遮って) 覚えてないわ、ガキの頃の事なんか。

ケイ いつも一緒に来たやんか。

ヒロシ 覚えてらん、そんな事。

ケイ 一遍な、ほら、あん時や。アンタ、よおふざけて家の鍵かけて、私、閉め出したやん。いつもやったら私が泣いたら開けてくれんのに、その日はいつも開けてくれへんかった。そやから石投げてん。窓に向かって思いっきり。ギザギザに割れた窓ガラス見て二人で青なつた。それやのにオカン、二人揃えて家から追い出してん。夕焼けで空が真っ赤で、そこでここ来て二人でくつついて座っててん、今みたいに。あ、そんな時に投げた石な、ここに、

と、膝の上の鞆を開けようとするケイ。

ヒロシ (遮って) 覚えてらんって。ガキの頃の事なんか。

ケイ ……ふーん…。

ケイは、鞆を閉じる。

二人の目はそれぞれに、それぞれの遠くを見つめていた…。

ヒロシ ……ゆるーくカーブしとる。

ケイ 何が。

ヒロシ あの、ズーっと先のライン。

ケイ そうか？

ヒロシ 地平線や。

ケイ ……地平線？

ヒロシ ああ…。水平線ではないやろ。

ケイ 水平線？

ヒロシ 少なくとも海ではない。

ケイ 海…。

ケイは、皮肉めいた口調で、

ケイ 溺れてもがく海の底。

ヒロシ 山でもない。

ケイ 連絡途絶えた遭難現場。

ヒロシ 沼地でもない。

ケイ 足を取られて底なし沼。

ヒロシ 雪原せっげんでもない。

ケイ 雪崩なだれに飲まれて虫の息。

ヒロシ 樹海でもない。

ケイ ロープにかかった白骨死体。
ヒロシ 砂漠か…？

ケイ オアシス求める骸骨達。
ヒロシ ……砂漠か。

ケイ 彷徨^{さまよ}い疲れてただの骨。

ヒロシ 砂漠か、ここは。

ケイ 骨は砕けて砂となる。

ヒロシ なあ。

ケイ 砂漠の砂は全部骨。

ヒロシ なあ！

と、ヒロシは、ケイの肩を押す。

ケイ 何よ、急に。

ケイの眺める景色を探るヒロシ。

ヒロシ ……なんや…。

ケイ 何。

ヒロシ そっちは違う景色かと思った。

ケイ ちやうやん。

ヒロシ 同じやんけ。

ケイ ちやうよ。

ヒロシ もうエエ。

ケイ 覚えてるやんか、ガキの頃の事。

ヒロシ ……。

ヒロシは、立ち上がる。

ケイ 何処行くん？

ヒロシ もう来る頃や。

ケイ え。

ヒロシ ここにな。

ケイ (ヒロシを見て) 誰か来んの？ ここに。

ヒロシ ああ。

ケイ 誰かと一緒に来たん？ ここに。

ヒロシ (きつぱりと) そうや。

ケイ ……ふーん…。

ヒロシ 誰、って聞けへんのか。

ケイ ……。

ヒロシから目を逸らすケイ。

ヒロシ、ケイの顎をクツと上げる。

ヒロシ 聞けや、誰が来るんか。

ヒロシを睨み付けるケイ。

ケイ 死んでも聞かん。

ヒロシ 聞けや。

ケイ 誰が聞かか。

ヒロシ (手を放し) 可愛げないヤツやな。

ケイ 可愛いヤツがエエんかいな。

ヒロシ ま、その時々やな。

ケイ 何が“その時々”や。

ヒロシは、砂山を下りながら、

ヒロシ 変な物落ちてなかったか？

ケイ 何よ、変な物って。

ヒロシ 残骸。大人の遊びの。

ヒロシに向かって、砂を投げ付けるケイ。

ヒロシは、知らん顔で下りて行った。

一人残ったケイは、砂山に突っ伏した。

サラサラと、砂が降る…。

モモの声 ニヤーン、ニヤーオ…。

猫の鳴き真似をしながら、モモがやって来る。

モモ 猫丸。猫丸居る？ ニヤーオ。猫丸う！

ヒロシ 居るがな、ここに。

モモ、ヒロシに近寄り、

モモ ちやうやろ、ニャーやろ。

と、ヒロシの喉を猫のように撫でるモモ。

ヒロシ (その手を振り払い) 止めるや。

モモ 言うてみ、ニャーって。

ヒロシ うるさいな。

モモ 何言うてんの、いつも言うてるやろ。ニャーオ。

ヒロシ 止めてくれ。

モモ 私も成らなアカンか？ 猫に。

それを上から見ていたケイは、携帯電話を取り出し、かける。

ケイ もしもし、エリリ？ ケイ。もう駅着いた？ ……うん。ほな、そこから反対の方に歩いて来て。…ちやうちやう、私の家と反対側。線路に沿ってまつすくな。…そう、さびれた方。エエからエエから、迎えに行くし。オモロイ物、見せたるわ。…うん、オモロイで。猫の猿芝居。

と、携帯電話を切るケイ。

ケイの声に、モモは、ヒロシから離れる。

モモ (小声で) 誰？

ヒロシ ……。

モモ なあ、誰よ。

ヒロシ 妹。

モモ 何十人目の？

ヒロシ 何が。

モモ 妹と言う名のなんとか。

ヒロシ 一人しか居らんわ。

モモ ……ホンマ者かいな。

ヒロシ みたいやな。

その間に、ケイが、下りて来る。

ケイは、そのまま二人の前に行くど、じっとモモを見つめる。

モモは、やや挑戦的に、

モモ 初めまして。
ケイ ……。
モモ こんにちは。モモと言います。
ケイ その時々やな。

と、ケイは、去って行く。

モモ 何よ、“その時々”って。

ヒロシ さあ。

モモ ふーん…。何で妹居おったん、ここに。

ヒロシ 居ってもおかしいやろ、ウチの倉庫やねんから。

モモ で、何してたん、二人で。

ヒロシ 兄妹きょうだいでする事なんかあるかいや。

モモ あるある。

ヒロシ ない。

モモ なんぼでもあるって。

ヒロシ 何すんねん。

モモ 思い出話とか、兄妹げんかとか、近親相姦とか、いろいろやな。

ヒロシ アホか、おまえ。

モモ 分からんで。”その時々”なんやろ？

ヒロシ そんな事、言うなや。

と、ヒロシは、モモの肩を抱く。

ヒロシ 恥ずかしかったやんけ、あんな事言うて。

モモ あんな事？

ヒロシ ああ。ばれてもた。

モモ じっくりもしてる事やん。

ヒロシ じっくりもしてるから恥ずかしいんやろ。

モモ アンタでも恥ずかしい事あるんや。

ヒロシ さすがにアイツの前ではな。

モモ ふーん。

と、モモは、ヒロシの手をかわして、倉庫の中を見回す。

モモ 何に使つってたん？ ここ。

ヒロシ 今は空き倉庫、昔、売春宿。

モモ そんな訳ないやん。

ヒロシ そんな訳あんねんな、それが。

モモ (ヒロシを見て) え、ホンマなん？

ヒロシ 駅前の商店街あるやろ。今は流行らんけどな、俺がガキン頃はその一角に女がタムロつてる場所があつたんや。そこに夜な夜な男が吸い寄せられて来よつた。水銀灯に集まる蛾みたいな。そこでここ来てお楽しみつて訳や。

モモ アンタ、それ知ってたん？

ヒロシ 親はここに近付くなつて言うてたけどな。行くなつて言われたら行きたくなるやんけ、普通。

モモ そやな。

ヒロシ そやから夜中、…言うてもガキの夜中やからな、まだ宵のうちやろけど家抜け出して覗きに来てん。

モモ ほんでほんで？

ヒロシ 中から何か唸り声みたいなん聞こえとつたわ。辺りは暗い。怖なるやんけ。アカン、こんなところで誰か殺されかけとる、見つかったらこつちもヤバイつて帰りかけたんや。

モモ うん。

ヒロシ でもガキの正義感、ちゅうか好奇心やな。相手の顔だけでも見とかなつて音たてんように覗いた訳や。ほな、裸で悶えて誰が居つたと思う？

モモ 誰が居つたん？

ヒロシ オカンやがな。

モモ えーつ。

ヒロシ ……こんなもんか、つて思たな。

モモ きつついなあ、それつて。

ヒロシ まあな。

モモ ……アンタ、少年時代からねじれてたんやなあ…。

ヒロシ ねじれねじれて今となる、やな。

モモ ふーん…。

と、倉庫の中を歩き始めるモモ。

モモ そやからここ離れてるんやな、アンタの家からだいぶ。

ヒロシ そう。

モモ 駅はさんで反対方向やしな。

ヒロシ ……え…。

モモ 子供の足やったら四〇分はかかるやろ？

ヒロシ ……おい。

モモ 何？

ヒロシ 何で知ってんねん、そんな事。

モモ え。

ヒロシ 知っとんか、俺の家。

モモ ああ…。

ヒロシ (大きな声で) 聞いてるやろ。知っとんか？ 俺の家。

モモ たまたま見つけてん、前に。

ヒロシ いつや。

モモ 前やがな。最近よう来^くんねん、この辺り散歩しにな。

ヒロシ おまえの家からわざわざ散歩するような距離ちやうやろが。

モモ 楽しいで。電車で1時間かけての散歩も。

モモは、砂山の方へ上って行く。

ヒロシ 何しとんねん。

モモ エエやん。ねじれた者^{もん}同士、仲良うしたら。

ヒロシ 一緒にすな。

モモ 一緒にやて。私かて小さい時な、

ヒロシ (遮って) 嘘じゃ、あんなん全部。

モモ え。

ヒロシ さつきの話。売春宿の。

モモ …嘘…？

ヒロシ ああ、ぜーんぶ作り話の嘘っぱちや。

モモ ……そう。

ヒロシ ここ、ただの倉庫や。じいさんが工務店やってたからな。そやから砂袋がようけ積んであつてん。時々、それが破けて砂がこぼれて俺の格好の砂場やった。そんだけの話や。

モモ ……そっか…。

ヒロシ そうや。

モモは、砂山に腰を下ろす。

と、そこにあつたアルミ製の鞆を手にするモモ。

モモ、その鞆を開けて、中の物を取り出し、

モモ ……何なん？ これって。

ヒロシ 何が。

モモ 中身。これこれ。

と、鞆を見せるモモ。

ヒロシ 知るか。

モモ アンタの？ これ。

ヒロシ ケイのやろ。

モモ 誰よ、ケイって。

ヒロシ 妹。さっきの。

モモ ああ、ホンマ者もんか。

ヒロシ そんなんエエから早はよ下りて来い。

モモ え？ 何て？

ヒロシ 早よ下りて来いって言うてんねん。

モモ 呼んでんの？ 私を。

ヒロシ ああ。

モモ ほな、ニヤーって言うてみ。

ヒロシ 何でやねん。

モモ 言うてみ、ニヤーって。

ヒロシ ……。

モモ 早よ。

ヒロシ ……ニヤーオ……。

モモ え、聞こえへん。

ヒロシ ニヤーオ。

モモ、砂山を下りながら、

モモ 聞こえへん。

ヒロシ ニヤーオ。

モモ もう一回。

ヒロシの鳴き真似は、徐々に大きくなる。

そのヒロシに向かって、歩み寄って行くモモ。

ヒロシ ニヤーオ。

モモ じつとしてや、猫丸。

ヒロシ ニヤーオ。

モモ 動いたらアカンで。

ヒロシ ニヤーオ。

モモ、ヒロシの肩を掴み、

モモ やつと掴まえた。世話が焼けるんやから、猫丸は。

ヒロシ ……。

モモは、ヒロシを愛しそうに撫でる。
ヒロシは、されるがままにモモに身を任せていた……。

ケイの声 ここやで、芝居小屋。

エリリの声 ホンマにこんなところに居んの？ 猫と猿。

ケイが、エリリを連れてやって来た。

ヒロシは、モモから離れる。

ケイ 居る居る。時々、化けの皮かぶってるけどな。

エリリ 薄気味悪い所やなあ…。あつ。

ヒロシとモモを見て、立ち止まるエリリ。

ケイ 何。

エリリ 何って……。

と、ヒロシとモモをうかがうエリリ。

ケイ、二人を指さし、

ケイ な、居ったやろ。

エリリ 居ったって……。

ケイ 今日は人間の皮かぶってるけどな。正真正銘の猫と猿。

エリリ ……ケイ……。

モモ いややな、ケイちゃん。

ケイ え。

モモ、笑顔でエリリに近寄り、

モモ ケイちゃんていつもこんな事ばかり言うねん。

エリリ ……はあ。

モモ ケイちゃんのお友達？

ケイは、そっぽを向き、モモから離れる。

エリリ ……はい。
モモ 私、モモ。
エリリ モモさん…ですか？

モモ ホンマは百恵って言うねんけどな、なんか良妻賢母の鑑かがみみたいでいややん、百恵って。
エリリ ……はあ。
モモ 知ってる？ 良妻賢母の百恵。
エリリ え？

モモ ほら、山口百恵。芸能界でめっちゃ売れてる時にサッと引退して、どんなにお声がかかっても絶対にマスコミに登場しない女。

エリリ ああ…。
モモ みんな何やかんや言うても引退してすぐ復帰するやん、芸能界って。そやから山口百恵は伝説になるんやろな。

エリリ はい。
モモ もし復帰したら旦那よりよっぽど儲けるで。だってあの旦那、CM位しかテレビで見いへんやろ？ ほら、何て言うたかな、あの旦那。……あれ、名前も忘れてしもたわ。

エリリ ……えーっと、三浦…。
モモ そうそう、三浦友和。ちゃんと知ってるやん。

エリリ 母親がよお言うてたから。
モモ ……母親？
エリリ はい。あと、「懐かしの名場面集」みたいな特番とかで見たことあるし。

モモ ……へえ。
エリリ 百恵さんはリアルタイムですか？

モモ いややなあ！

エリリ あ、すいません。そんな訳ないですよね。

モモ モモでエエねん。

エリリ ああ…。

モモ 私、苦手やから良妻賢母って。

エリリ ……はい。

その時、ヒロシが、横から、

ヒロシ リアルタイムやで。

エリリ ……え…。

ヒロシ (モモに) そやろ？

モモ 何でよ。

ヒロシ そうやんけ。

モモ 小さい時の事やんか。

ヒロシ 小さい時でもリアルタイムって言うんや。

モモ ふーん。知らなかった、そんな事。

ヒロシ 大きい時でもな。
モモ ……。

ちらと、ヒロシを睨むモモ。
ヒロシは、笑いながら、モモの体に触れる。

エリリ ……あの…。
モモ 何？

エリリ、ヒロシに向かって、小さく頭を下げ、

エリリ こんにちは。

ヒロシ ……え。

エリリ 挨拶してなかったから。

ヒロシ ああ。

モモ (ヒロシに) 「こんにちは」って言われたら「こんにちは」って言うんやで、普通。

ヒロシ こんにちは。

エリリ 私、エリリって言います。ケイはエリリって呼んでますけど。

ヒロシ 俺、ヒロシ。ケイはアンタって呼んでます。

エリリ ……アンタ？

ヒロシ 昔は「お兄ちゃん」、今「アンタ」。

エリリ ああ、お兄さんですか。

ヒロシ 一応な。本人はどう思てるか知らんけど。

エリリ (ケイに向かって) ケイ、早よ言うてよ。お兄さんやったら。

三人から、離れた所でケイは、

ケイ 「お兄さん」みたいにエエもんちやうって。

ヒロシ (エリリに) 結構照れ屋やからな、アイツ。

エリリ そうなんや。

ヒロシ あれでも小さい時は俺のあとばっかについて来てな、ちよつとは可愛げあってんで。

エリリ へえ…。

モモ ふーん…。

と、エリリとモモは、それぞれの眼差しで、ヒロシを見る。

ヒロシ 今は鬱陶しいだけやけどな。連れの妹なんかみんな可愛い子ばっかしやで。俺、かっこ

悪いし妹、居らん事にしとんねん。(エリリに) 何人兄弟なん？ その、エリちゃんは。

モモ エリちゃんて。

ヒロシ (エリリに) そやろ？

エリリ はい。私、一人っ子なんです。

ヒロシ そうなんや。

エリリ だから欲しかったですよ、小さい時から優しいお兄さん。

モモ (ヒロシに) モモちゃんには聞いてくれへんの？ 何人兄弟って。

ヒロシ エエがな。

モモ (エリリに) この人な、私の事、名前で呼んでくれた事ないねん。

エリリ そうなんですか？

モモ うん。呼ばれたいよなあ、普通。

エリリ ……はあ。

モモ 呼ばれたいって。特別な呼び方で。

ヒロシ 特別な呼び方？

モモ うん、二人だけの特別な呼び方。猫丸、とかな。

ヒロシ ……。

ヒロシは、そっぽを向く。

エリリ お付き合いされてるんですか？ お二人。

二人、同時に、

ヒロシ (怪訝そうに) 何でやねん。

モモ (嬉しそうに) 何で？

エリリ、一瞬、二人の様子を見た後、

エリリ え、二人で居おられるから、ここに。

モモ (少し笑って) 二人で居おるから、か。

エリリ ……変ですか？

モモ いや、エエねんけどな、二人仲エエから、とか言うんやん、普通は。

エリリ あ、そうですね。

ヒロシ 関係ないで、俺ら。

モモ (ヒロシに) 何よ、それ。

エリリ そうなんですか？

モモ (エリリに) この人、照れ屋さんやから。ケイちゃんと一緒に。なあ。

と、ヒロシに触ろうとするモモ。

ヒロシ、その手を掴み、

ヒロシ コイツも好きやねん、知らん人おちよくんのが。

モモ (エリリに) 誰が誰をおちよくつてるかは分からんで。

エリリ ……はい…。

間。

それまで離れていたケイが、エリリに近寄り、その手を引く。

エリリ どないしたん。

ケイ 上、行こ。

エリリ 上？

ケイ うん。ここよりは空気がきれいやから。

モモ 上には空気清浄機でもあるんやな、きつと。

ケイ (モモに) 今度来る時、買^いうて来てな。空気清浄機。上の空気まで汚染されたらかなわんし。

モモ それより浄水器買^いうて来たげるわ。汚染された体は中から綺麗にせなしゃーないから。

ヒロシ (エリリに) な、こんな妹かつこ悪いやろ。

ケイ、エリリの手を強く引く。

エリリ ケイ、痛いって。

ケイ 早よ行こ。脳味噌まで汚染される。

エリリ (ヒロシとモモに、小さく頭を下げ) それじゃ。

ヒロシ おお。

ケイは、エリリを砂山の方へと導く。

ヒロシ (モモに) ムキになんなや、子供相手に。

モモ なってないで、全然。可愛いから遊んだってんねん。

ヒロシ ふーん。

一方、エリリは、ケイに手を引かれながら、

エリリ (小声で) なあ。

ケイ ……。

エリリ なあって。

ケイ ん？

エリリ ホンマはどうなん？ あの二人。

ケイ どうって？

エリリ 付き合^おうてるん？

ケイ ちゃうやろ。

エリリ ホンマ？

ケイ うん。

エリリ ホンマにホンマ？

ケイ ホンマやっつて。

エリリ そっか！

ケイ 何で？

エリリ 何かエエなあ、と思て。

ケイ あの二人が？

エリリ ちゃうよ。

ケイ ほな何よ。

エリリ (さらに小声で) ケイのお兄さん。

ケイ、エリリを見て、

ケイ ……え。

エリリ ケイのお兄さんやんか。(ケイを軽く叩き) もお！ 何遍も言わせんといてよ。

ケイ ……そんなエエもんちゃうで。

エリリ やっぱり言うてた通りや、お兄さんが。

ケイ 何それ。

エリリ 照れ屋さん、ケイっつて。

ケイ そんなんちゃうよ。

砂山に着いたケイとエリリ。

その時、ケイは、砂山に鞆の中身が散乱しているのを認める。

ケイの顔が、一瞬にして強張り、その場に立ち尽くす。

ケイ ……。

エリリ、ケイの様子に気付き、

エリリ ……どうしたん？

ケイ ……。

エリリ ケイ。

ケイは、その場に散乱していた物を掻き集めて、手当たり次第に鞆の中に入れる。そして蓋を閉じると、ヒロシとモモの元へと駆け下りて行った。

エリリ ケイ!

その場に残されたエリリ。

ケイは、ヒロシとモモの前に立ち、

ケイ 誰よ。

ヒロシ 何やねん。

ケイ (鞆を差し出し) 誰よ、これ開けたん。

モモ 私や。

ケイ …私って…。

ケイの肩が、怒りで震えている。

モモ ガラクタしか入ってなかったで。

ケイ ……。

ケイは、モモに向かって鞆を投げ付けると、走って出て行った。

その姿を見つめているヒロシ。

サラサラと、砂が落ちていく…。

モモ 危なあ。ちよつと何よ、あれ。

ヒロシ ……。

モモ 何とか言うてよ、ホンマ者の妹もんやろ。

ヒロシ しゃーないで。おまえが勝手に人の物もん触ってんから。

モモ、冷めた目でヒロシを見て、

モモ ……やっぱり兄妹きょうだいやな、アンタら。

ヒロシ 何がや。

モモ お互いにかばい合うおてる。

ヒロシ かばい合うてる?

モモ そうや。他人の入る隙間なんか全くないわ。

ヒロシ 勘違いすんな。

エリリが、砂山から下りてくる。

エリリ あのこと…。

ヒロシ 何や。

エリリ ケイ、どうしたんですか？

ヒロシ さあ。

モモ (鞆を差し出し) これよ。

エリリ …でもこれって。

モモ 何？

エリリ ケイ、これ置いてったんですか？

モモ そ。私へのプレゼントかも。

エリリ だってあの子、いつもこれ大事そうに持ち歩いてたんですよ。

ヒロシ …え…。

エリリ 中に何入ってるの、って聞いても「秘密！」って嬉しそうにして。

ヒロシ …そうなんや…。

エリリ はい。

鞆を見つめるヒロシとエリリ。

その様子に、モモは、

モモ そんな事言うても中身知ってる？

エリリ だから「秘密」って…。

モモ、鞆を開け、エリリの目の前に突き出し、

モモ 中身、これよ！ これのどこが秘密なんよ。

エリリ (中身を見て) …貝殻…、石ころ…、ボタン…、ビー玉…、ジュースの王冠、…
キーホルダー…。

モモ な、ガラクタやろ。それも大昔の汚いやつばっかしやないの。

それを見て、ヒロシは、鞆をモモの手から奪い取る。

ヒロシ もう止める！

モモ …何よ…。

ヒロシ 無理矢理入ろうとすんなや。自分の入る隙間がないからって無理矢理なあ。

と、ヒロシは、鞆を持ったまま、外へと出て行った。

その後ろ姿を、呆然と見送るモモとエリリ…。

エリリは、小さく溜息をつく。

モモ、エリリに作り笑いをして、

モモ ……何よねえ、あれ。

エリリ ……はあ。

モモ 訳分からんわ。

エリリ ……はい。

モモ うちなんか女姉妹きょうだいばつかしやし、訳分からん、あの人の事。ぜーんぜん。

エリリ ……はい。

モモ 一人っ子やったらもつと分からんやろ？

エリリ ……はい。

モモ つまらんよな、一人っ子って。

エリリ そうですね。

モモ はあくあ…。

と、モモは、腰を下ろす。
間。

モモ でもそれもエエかもな。

エリリ え。

モモ 一人っ子も。好きな物ものはふんだんに買こうてもらえるし、兄弟喧嘩けんかも無いし。訳分からん事

って多いんやで、兄弟居おると。

エリリ はい。

モモ て言うても分からんか、一人っ子には。

エリリ ……兄弟の事は少しも。

モモ そうやんな。分からんよな、あいつらの事も。……頭痛あつたまいわ。

エリリは、モモを見つめ、

エリリ ……でもね…。

モモ 何？

エリリ 兄弟居いなくても気にはなりますよ。

モモ 何が。

エリリ ケイどこ行ったんやろ、とか、お兄さんはどこ行ったんやろって。

モモ ふーん。

エリリ 百恵さん、気になりませんか？

モモ モモでエエって。

エリリ お兄さんの事、追い掛けなくていいんですか？

モモ エエよ。そのうち帰って来るやろ。

エリリ 帰って来るって倉庫ですよ、ここ。

モモ 私が居るのに帰って来ないはずないやん。

エリリ もしかしてそのまま家に帰るって事もあるじゃないですか？

モモ そんな時はそんな時や。アンタと一緒に朝まで居るわ、ここに。

エリリ 朝まで居るつもりありませんけど、私。

モモ ほな、どうすんの。

エリリは、少しの間、考えた末、

エリリ 二人、捜して来ます。

モモ お好きにどうぞ。

エリリ はい。

と、行きかけて、モモの方を振り返るエリリ。

エリリ 百恵さん。

モモ モモでエエって、モモで。

エリリ 私、思うんですけど。

モモ ん？

エリリ 私、一人っ子で良かったです。

モモ 何で。

エリリ 百恵さんみたいなお姉さん、欲しくないですから。

と、エリリは、出て行く。

残ったモモは、エリリの去った方をじっと睨み付けていた…。

モモ、空を仰ぎ、「プレイバックPart 2」のサビの部分进行を歌う。

歌い終わると、モモは、立ち上がり、尻をはたく。

辺りは、既に薄暗くなっている。

モモ …アホらし…。

と、モモも、出て行こうとする。

コウ あのう。

その時、突然やって来たコウの声に、驚くモモ。
コウは、帽子を目深にかぶっている。

モモ ちよっと、何やの。

コウ ……すいません。

モモ びっくりした。

コウ すいません。あの…。

モモ 何。

コウ ここの方ですか？

モモ ここの方は居おらんよ。今、誰も。

コウ ……そうですか。

モモは、出て行こうとする。

コウ ちよっと待ってください。

モモ 何よ、もお。

コウ この方、いつみえますかね？

モモ さあ、じき戻るかも知れんし戻らんかも知れん。分からんわ、そんな事。

コウ 僕、待っててもいいでしょうか？

モモ ここに？

コウ はい。

モモ 一人で？

コウ はい。

モモ 好きにしたら。私は行くで。

と、行きかけるモモ。

その背中に、コウは切羽詰まった表情で、

コウ 僕、ここに居らなあかんのです。

モモ (小声で) ……居りよ、勝手に。

コウ どうしても居らなあかんのです！

モモ ……え……。

と、振り返るモモ。

二人の目が、合った。

暗転。

薄暗い倉庫。それでも人の形は、何とかまだ見える夜に近い夕方。砂山では、ケイとコウが向かい合い、両手をつないで座っている。下では、モモが暇を持って余している。

ケイ せっせっせーのよいよいよい。

ケイとコウ おちやらか おちやらか おちやらか ホイ。おちやらか 勝ったよ おちやらか
ホイ。おちやらか 同点 おちやらか ホイ。

と、手遊びをするケイとコウ。

その遊びは、しばらく続けられ、徐々に早くなる…。

ついには、笑い出すケイとコウ。

ケイ も一回やろか？

コウ いや、もういいです。

ケイ 私はエエよ。

コウ たくさんやってもろたし。

ケイ 気にせんでエエって。

コウ 満足しました。

ケイ ホンマに？

コウ はい。ありがとうございます。

ケイ (コウを指し) えーっと…。

コウ コウです。

ケイ コウさん、オモロイな。

コウ そうですか？

ケイ オモロイって。言われた事ない？

コウ うん、一遍も。

ケイ そうなんや。

コウ “おかしい” やったらよお言われますけどね。

ケイ へえ。センスない奴らやな。

コウ ケイさんも言われるでしょ。

ケイ 何て？

コウ “オモロイ” って。

ケイ ないで、一遍も。

コウ そうなんや。

ケイ “変わってる” やったらよお言われるけどな。

コウ ふうん。

コウ、砂山の砂を触り、

コウ ここ、エエなあ。

ケイ ここって？

コウ (砂山の上に両手を広げ) ここですよ。なんか懐かしい感じがする。

ケイ エエやろ。

コウ うん。

ケイ お気に入りやねん。

コウ 分かるような気がします。

ケイ ここに居たら落ち着くねん。

コウ へえ。

ケイ 小さい頃、ここでよお遊んだし。

コウ ……小さい頃？

ケイ うん。兄貴と一緒にいつもここで遊んでん。楽しかったでえ。

コウ へえ…。ここ、ケイさんの大事な場所なんや。

ケイ うん。ここやと何かちよつと素直になれたりな。

コウ 素直？

ケイ うん。小さい頃みたいに必死でしょーもない事やれたりな。

コウ ……小さい頃…。

ケイ そう、小さい頃ってあるやん。何でこんなに夢中になるんやろ、って事に命賭けてるみたいなの。

コウ ……はあ…。

ケイ 大人になつたらな、明日があるから今日はこれ位にしとこってセーブするやん。でも小さい頃って手抜きなんか無いねん。いつもパワー全開でやるだけやってボタンキューってな。

コウ へえ。

ケイ 今しか見てないねん、小さい頃って。昨日の事も、明日の事も全然見てへん。……それやのに何で大人になつたら見るんやろなあ。昔の事とか、先の事とか、そんな事ばつかし…。

コウ ……そうか。

ケイ そうか、ってコウさんもそうちゃうん。

コウ ……え。

ケイ そやから「おちやらか」したかったんちゃうん。あの頃は良かったなあって。

コウ そうなんかなあ…。

ケイ ややなあ、もお。普通居おらんで。する事無いし、「おちやらか」しましょか、なんて言う

奴。

コウ いや、あの人してくれんかったし。

ケイ あの人って？

コウ、モモを指さし、

コウ あの人。

ケイ コウさん、すごいなあ。

コウ そうですか？

ケイ あいつにも言うたんや、「おちやらか」しよって。

コウ はい。

ケイ 人見るやん、普通。

コウ そうかなあ。

ケイ 何て言うた？ あいつ。

コウ え。

ケイ 「おちやらか」しよって言うたら。

コウ ああ、初めは知らん顔してはったんです。

ケイ うん、ほんで。

コウ そやから聞こえへんかったんかなあと思って、もう一回言いました。

ケイ 「おちやらか」しませんかって？

コウ 何で分かるんですか。

ケイ 分かるよ、それくらい。ほんで？

コウ 居おるんやったら黙って居り、って。

ケイ 分かる分かる。

コウ ケイさんもすごいなあ。

ケイ 何で？

コウ 何でも分かるから。

ケイ、コウを見て、小さく笑う。

コウ 何か変な事言いましたか？ 僕。

ケイ ううん、ちやうちやう。…そやな、私もんらすごい者同士やな。

コウ はい。あ、下行きましょか。

ケイ え。

コウ あの人んとこ。

と、再び、モモを指さすコウ。

ケイ 居おろうや、ここに。

コウ 何ですか？

ケイ 何でって…。

コウ はい。

ケイ 何かなあ、下、臭いねん。

コウ 臭いって？

ケイ こう、何か、動物臭いねん。
コウ 動物って、あれですよね。…象とか…、熊とか…、キリンとか。

ケイ そんな動物らしい動物と違^{ちが}って、何て言うか、ほら、そこらへんにゴロゴロ居^おるメスのな、
発情した匂い。

コウ メス？

ケイ うん。尻尾上げて、尻見せて、オス猫誘^こってるメス猫の匂いや。玉さえ付いてたら何でも
エエねん。

コウ やっぱりすごいなあ。

ケイ 何が。

コウ ケイさん、何でそんな分かるんですか。

ケイ 何で？

コウ はい。僕、ちっともそんな分かりませんでしたよ。

ケイ そうやんな、普通。

コウ それって…メスの直感…かなあ。

ケイ え。

コウ ケイさんも持つてるんですよ、きつと。メスの触覚。

ケイのコウを見る目が、険しくなる。

コウ あの…、何か。

ケイ なあ！

と、コウに顔を寄せ、見つめるケイ。

コウ ……はい？

ケイ 私の事、好き？

コウ ……え…。

ケイ どうなん？

コウ ……。

ケイ 私の事、好き？

ケイを見つめたまま、戸惑っているコウ…。

ケイ、コウから離れ、

ケイ っつて、こういう事？

コウ は？

ケイ メスって。

コウ ……さあ。

ケイ オモンないわ。

コウ え。

ケイ オモンない。ぜーんぜん。

と、ケイは、砂山にもたれかかる。

コウ 下行きましょか。

ケイ 行けば、勝手に。

その時、モモが二人を見上げて、

モモ エエで。私に気い遣わんでも。

コウ 気は遣ってませんけど。

モモ ほな体やつたら使つってくれるん？

コウ 体もちよつと…。

モモ 真剣に答えなや。言うただけやん。

コウ (ケイに) …僕、やっぱり行きますわ。下に。

と、立ち上がるコウ。

モモ エエってエエって私の事は。二人で楽しんどったらエエやん。動物ごっこして。

コウ …動物ごっこって…。

モモ ちやうかつたん？

ケイ そつちやろ、猫ごっこは。

モモ そんなに一緒にしたいん？ 私と動物ごっこ。

ケイ ……。

コウ ケイさん、行きましょ、下。

ケイ どうぞ、ご自由に。

コウは、砂山から下りて行こうとする。

その時、メグミがやって来た。手には、アルミ製の小さな手提げ鞆たもとを持っている。

メグミ ……すいません。

一斉にメグミを見る三人。

メグミ すいません。どなたか居おられますか？

モモ 居おるよ。

メグミ はい？

モモ 居おるやないの、ここに。

メグミ ……え……。

と、メグミは、人の声のする方を探っている。

メグミ すいません。ちょっと暗くてよく見えないんですけど。

モモ 私にはよお見えてるけど。

メグミ 目が慣れないもんで…。電気でも点けてもらえるとありがたいんですけど。

モモ ここ、そんなんあるんかなあ。

メグミ ありませんか？

モモ (大きな声で) ちょっとおー。

メグミ はい？

モモ ちやうねん。(さらに大きな声で) ちょっとおー、ケイちゃん。電気どこ？

ケイ 自分で探して。

モモ (メグミに) やって。私も知らんし自分で探して。

メグミ ……はい。

と、手探りをしながらも、真っ直ぐに電気のスイッチへと進んで行くメグミ。

メグミがスイッチに手を触れると、倉庫の中に頼りない灯りが点く。

メグミは、モモを見つけ、頭を下げる。

メグミ すいません、突然。そこに居おられたんですね。

モモ なあ。

メグミ はい。

モモ すごい勘やな。

メグミ 何がでしょう？

モモ 何で分かったん？ 電気のある場所。

メグミ ……え。

モモ 迷わんと真っ直ぐ行ったやん。

メグミ ああ、だいたいこの辺りかなあ、ってそれだけですよ。

モモ (ケイに) ちよっと見たあ？ ケイちゃん。

ケイ ……。

モモ (なおもケイに) この人みたいやなあ。

ケイ うるさいねん。ケイちゃん、ケイちゃんて。

メグミ、ケイを見て、

メグミ すいません。勝手に点けて。

ケイ (つつけんどんに) かまへんよ。どうせ暗なって来たし。

メグミ でも…。

モモ (小声でメグミに) 気にせんとき。兄貴を取られてすねてるだけやから。

ケイ うるさいって言うてるやろ！

その時、メグミの視界に、コウの姿が入った。

メグミ コウ！

コウは、砂山の方へ行こうとする。

メグミ 探してたんよ、私。

コウは、歩みを止めない。

メグミ コウ、ちょっと待ってよ。

立ち止まるコウ。

メグミ 下りて来てよ、こっちに。コウ！

コウ ……。

メグミ (優しい声で) な、早く。

コウは、メグミの傍へと下りて行く。

メグミ 心配したやんか。

コウ ……うん。

メグミ あちこち探したんよ。急に居おらんようになって。

コウ ごめん。

メグミ ホンマにもお…。

コウ ごめんって。

その間に、ケイも傍にやって来る。

ケイ (コウに) 知ってる人なん？

コウ ……うん。

メグミ すいませんでした。お世話になってたんちやいますか？

ケイ 全然。

モモ (メグミに) 「おちやらか」しただけやで。私とちゃうけどな。

メグミ すいません。私らここに来て間がないんです。それやのにこの人、居らんようになって
しもてどうしよかって思てました。慣れん所で一人、迷子にでもなったらどうしよって。

モモ 大人で迷子はないやろ。

メグミ あ、そうですね。

モモ それに迷いながら来たって感じでもなかったで。

メグミ そうなんですか？

モモ うん。「ここに居おらなあかん」って言うてはったし。

メグミ ……ここに居おらなあかん…。

モモ そう。何でかは聞いても教えてくれんかったけどな。

メグミ ……そうですか。

ケイ (コウに) 何でここに居おらなあかんの？

コウ ……それは…。

その時、エリリが、戻って来た。

手には、ケイのアルミ製の鞆。そしてその頬は、やや紅潮している。

ケイ ああー、エリリ。

エリリ あ、戻ってたんや。

ケイ 戻ってた、って私すぐ帰って来たよ。

エリリ そうなん？

ケイ エリリこそどこ行ってたん。

エリリ ……え…。

ケイ もう帰ったかと思たやん。携帯かけてもつながらへんし。

エリリ ……ケイ探しに行ってたんよ。

モモ あつちもこつちも尋ね人ばっかしやな。

と、モモは、四人から離れる。

エリリ、鞆をケイに差し出し、

エリリ これ。

ケイ ……ああ。

モモ ……え…。

その様子を見つめているモモ。

エリリ ケイ、いつもこれ大事そうに持ってたやろ。

ケイ ……うん。

エリリ はい。

と、鞆を手渡そうとするエリリ。

ケイ エエねん、もう。

エリリ え。

ケイ もう要らん、そんなん。捨てて。

エリリ なに言うてんの。大事な物もんが入いってるんやろ？

ケイ 大事な物もん？

エリリ うん。

ケイ 見たんやろ？ 中身。

エリリ でも大事なんやろ？ ケイにとっては。いっつも持もつた物もんやんか。

ケイ ……。

エリリ 今まで大事にしてたんやからこれからも大事にしとき。な。

と、ケイの手に、鞆を持たせるエリリ。

ケイ ……うん。

メグミ (コウに) 私わらも失礼ししよか。

コウ 僕わ、もうちよつと居おらせてくれへんか。

メグミ 居おるってここに？

コウ うん。

メグミ 長く居おつたら疲つかれるよ。それでなくても昼過ぎから出歩でいてるんやろ？

コウ 大丈夫だいじゆうやから。

メグミ 早はやよ帰かえろ。

コウ ここに居おりたいねん。

メグミ そんなん迷惑めいわくやん、皆みなさんに。

モモ 私わはいっこもかまへんで。

コウ (ケイに) ケイさん、いいでしょうか。

ケイ エエで全然。一番帰かえってほしい人が居おる以上、誰たれが居おっても一緒いっしょやし。

と、モモを見るケイ。

エリリは、コウとメグミを見て、

エリリ (ケイに) ……誰たれ？

ケイ お客さん。私もよお知らんねん。
エリリ そうなんや。

メグミ (コウに) ほな、もう少しだけやで。
コウ ああ。
メグミ すいません、ホンマに。
コウ すいません。

ケイ 気にせんと好きなとこに居^おって。
メグミ ありがとうございます。

と、メグミは、コウの背に手を当て、少し離れた所に二人で腰を下ろす。
ケイは、鞆を傍に置きながら、

ケイ (エリリを見て) えらいほつぺた赤いなあ。

エリリ ……え…、そう？

ケイ うん。リンゴのほつぺや。

エリリ 外寒かったからかなあ。

ケイ え？ 暑いやん、今日。

エリリ ……そう…？

ケイ うん。ジトーツて蒸し暑い。

エリリ そうかなあ…。

モモ 匂う匂う。

ケイ 何がよ。

モモ 動物の匂い。

エリリ え。

モモ この匂いと呼び寄せられて集まって来んねん、オスが。夜の水銀灯に群がる蛾みたいな。

ケイ 誰が“蛾”やねん。

モモ 誰が“蛾”でもエエけどな、忘れたらあかんで。水銀にかて毒はあんねん。

エリリ それってどうゆう事ですか？

モモ さあ、どうゆう事やる。聞いてみたら？ もうじき戻って来る蛾に。

エリリ ……え。

ケイ 何言うてんか分からんわ、ホンマ。

モモ、ケイとエリリに近寄り、

モモ なあ、男と女が一つになるやろ？

ケイ はあ？

モモ 心が、っていう意味ちゃうで。そんなんあり得へんからな、男と女の心が一つになるなんて。セックスン時やで。

ケイは、露骨に顔を背ける。

モモ そんな顔せんでもエエやん。人間が太古の昔からずーっと続けてる事や。ケイちゃんかてそれで生まれて来たんやろ？

ケイ うるさいな。

モモ なあ、ケイちゃん。

さらにケイに近寄るモモ。

ケイ 気安く呼ばんとつて。

モモ 男が中に入ってる時な、そんな時に一番よく言う言葉って何やと思う？

ケイ ……。

モモ 言うてみ、何でも。

ケイ あっち行けや。

モモ 今後のために教えたるわ。「あつたかい」って言うねん。アホの一つ覚えみたいにといつもこいつも「あつたかい」ってな。

ケイ、モモを睨み付け、大声で、

ケイ それがどないしたんよ！

モモ アンタのお兄さんもやで。「あつたかい」やて。

と、大笑いをするモモ。

メグミは、ハツとしてコウを見る。

メグミ えっ……。

それに気付いたモモは、メグミに、

モモ アンタもそうなんや。

メグミ ……私……？

モモ うん。アンタも言われたやろ、その人に。顔にそう書いてある。

メグミ そんな……。

と、頬に手を当てるメグミ。

モモ そんなもんやねん、「あつたかい」。アホやな、みんな。

ケイ ……上行こ。

と、ケイは、エリリの手を引き、砂山の方へ行こうとする。

その時、ヒロシが、戻って来た。

エリリ あ…。

ヒロシの顔を見て、俯うつむくエリリ。

ヒロシは、その横をすり抜けて中へと入る。

モモ、ヒロシの横に行き、

モモ お帰り。

ヒロシ おお。まだ居おったんか。

モモ 見事な時間差攻撃やな。

ヒロシ はあ？

モモ 見事にバレバレの、って意味やけどな。

ヒロシ 何の事や。

モモ 何の事ってエリちゃん正直やから。なあ。

と、エリリの顔を見るモモ。

エリリは、戸惑いを隠せない。

ケイ どないしたん、エリリ。

エリリ 何もないよ。

ケイ はあ？

エリリ (慌わててケイを見て) 何もないで。ホンマに何も。

ケイ ……え…。

モモ な、正直やろ。何かあったって告白してはる。

エリリ ホンマに何もないんやで。信じてや、ケイ。

ケイ ……エリリ…。

エリリ ん。

ケイ 何言うてんの？

エリリ え。

ケイ 何言うてんか分からへんわ。

エリリ ……。

モモ 「あつたかい」とでも言われたんちゃう？

エリリ そんな事してません。

モモ ほな何でアンタがああの鞆持ってたん？ ケイちゃんの。

エリリ え。

モモ あれな、(ヒロシを指さし) この人が持って出たんやで。外行く時に。

エリリ ……。

ヒロシを見るエリリ。

モモ この人と接触がなかったらそれをアンタが持って来るはずないやろ？

エリリ ……それは…。

ヒロシ 捨てられた子猫が心細げに歩いててみい。人気のない、暗なりかけた倉庫街をやで。手伸ばして抱き上げよ、って気にもなるやろが。

モモ ホンマ猫が好きやねんな。そんでそのままゴールインって訳かいな。

ヒロシ 何がゴールインやねん。

モモ ほな何か？ 今日はキス止まりか。

ヒロシ キスの一つして何が悪い。

ケイ えっ。

と、エリリを見るケイ。

エリリ、慌てふためき、

エリリ ケイ、ちやうで。

モモ ケイちゃん、こんな時に使うんやで。メスの直感と触覚はな。

ケイ ……ほんのさっきの事やんな。エリリがそこで、ああ言ったのって。

エリリ ……。

ケイ ……そうやんな…。

小さく頷くエリリ。
うなず

モモ 何言うてたん？ ヒロシの事好きやとでも言うてたん？

エリリ ……そんな…。

モモ そんでケツ振っておびき寄せた訳や。

ヒロシは、エリリの傍へ行き、モモに向かって、

ヒロシ 自分が誰彼構わずケツ振るからって一緒にすな。

モモ そのケツに食らい付いて叫び声上げるのアンタやろ。

ケイ ホンマ、その時々やなあ！ どいつもこいつも。

と、ケイは叫ぶと、走って出て行った。

砂が、サラサラと降り始める。

ヒロシ、モモを見つめ、

ヒロシ 言うたやろ、無理矢理入ろうとすんなって。

モモ 何？

ヒロシ 自分の入る隙間がないからって無理矢理なあ。

エリリ もう止めてください！

モモ 何よ、泥棒猫が。

エリリ 百恵さん。

モモ モモでエエってモモで。

エリリ 百恵さん、楽しいですか？ そんな人を苛つかせる事ばっかし言うて。

モモ 苛つかせてる？ 私。

エリリ 苛つきます。百恵さんと居ると。

モモ モモでエエって言うてるやろ。

エリリ 百恵さん、いっつもそう言いはるけど、一回もないでしょ。“モモ”って呼ばれた事。

モモ ……え…。

モモの顔が、強張る。

エリリ 一回も呼ばれた事ないから何遍でも自分で言いはるんですよ。“モモ”って呼んでって。

モモ 呼んで、なんていつ言うたんよ。

エリリ おんなじですよ。でも誰も呼ばないんです。呼びたくないんです。

モモ ……。

エリリ もう止めましようよ、こういうの。

モモは、エリリとヒロシから離れる。

砂が、サラサラと降る音だけが聞こえている…。

モモが、ようやく口を開く。

モモ この駅下りたら商店街があるやろ。こっちに来るのは反対方向やな。幾つもシャッター閉まつてる中、かろうじて開いてる店のぞきながら歩くねん。床屋、漬物屋、クリーニンング屋、豆腐屋。時々お客さんが居って店の人と喋ってるわ。その三筋目を右に曲がんねん。真っ直ぐ行くと小さい滑り台と雑草の生えた公園がある。それを過ぎたら住宅街や。住宅街言うても小さい敷地いっぱいいっぱい二階建て建てて、小さい前庭があるような家がぎゅうぎゅうに並んでんねん。小さい庭にきちんと並んだプランターにはな、季節季節の花が咲く。そんな事が家の人らの楽しみやねん。…そこ入って幾つかの角曲がったら、右側の三軒目や。他とおんなじような普通の二階建てやった。門の横には郵便ポストがあつてな、時々取り忘れた新聞がのぞいててん。夕方になったら他の家とおんなじような灯りがポツと灯るねん。私、この家でその人が生活してるって想像出来へんかった。私にとって特別な人が住

んてる家はきつと特別やって思ってたのに、外からは他の家とおんなじように見えんねん。いっ
こも変わらへんねん。でももしかしたら特別やと思てるその人はホンマは特別でもなんでもな
くてな、他の人とおんなじ普通の人なんかも知れんなあ、とも思ってたん。…私の特別、って…
何やろ…。

と、帰り支度を始めるモモ。

それを黙って見守る他の四人。

モモは、帰り支度が整うと、エリリの前に行く。

モモ ……綺麗な肌してんなあ。

エリリ ……そうですか。

モモ 新しいもん好き、って知ってる？

エリリ ……え。

モモ 何でも目新しいもんが欲しくなるって奴。

エリリ はい。

モモ そやけどたとえ新しいもん手に入れてもな、一日経ったらそれはもう古いねん。毎日毎日
新しいもんは出て来るからな。分かる？

エリリ ……はあ。

モモ この人、先の事しか見てないで。どうやって新しいもん見つけよかってそれしかないねん。
昨日の事にも今の事にも興味はない。これから先の事だけや。…気いつけや、新しいもん好
きには。

そして、ヒロシをじっと見つめると、モモは去って行った。

その様子を黙って見つめているコウとメグミ。

ヒロシは、その視線を感じてそちらを見る。

ヒロシ ……変なところ見せてしもて。

メグミ あ、いえ、こちらこそすいません。却って気い遣わせてしもて…。(コウに) な、も
うエエやろ。失礼しようや。

と、立ち上がるメグミ。

コウ ……先の事しか見てない、って？

ヒロシ え。

コウ 昨日の事にも今の事にも興味はない、ってどうゆう事ですか？

メグミ コウ。何言うてんの。

コウ 教えてもらえませんか？

コウを制して、

メグミ すいません。気にしないでください。

コウ 教えてください。

ヒロシ ……よお分からんわ、俺も。

コウ よお分からん、って自分の事なんでしょう？

ヒロシ 自分の事やから余計分からんねん。

コウ ……そうか…。

と、肩を落とすコウ。

ヒロシ そんなもんやで。

コウ 自分の事は分からんか…。

メグミ エエやんか、な。(ヒロシとエリリに) 妹さん、どうされたんでしょね。

エリリ ……私、電話してみよかな…。

ヒロシ 普通に話出来るか？

エリリ いつまでも知らん顔は出来へんわ。バイト先でも会うし。

ヒロシ 俺が先出るわ。

エリリ え。

ヒロシ そんでちゃんと言うから。そのあとにしろや。

エリリ ……ちゃんと言う、って…？

ヒロシ ちよつとこつち。

と、ヒロシは、エリリの肩に手を回して、隅に導く。

ヒロシ 俺、ちゃんと言うから。エリちゃんと付き合うって。

エリリ え…。

と、ヒロシを見るエリリ。

ヒロシ あかんか？

エリリ ……そんな。

と、エリリは、恥ずかしそうに俯く。

ヒロシ どないしてん。何かあいつの言うた事、気にしてるんか？

エリリ あいつって？

ヒロシ モモの言うた事。

エリリ え。

と、エリリは、ヒロシを見る。

ヒロシ 何や。

エリリ なあ、誰？ ……あいつって。

ヒロシ モモやろ。

エリリ ……そうなんや。

と、ヒロシの手から逃れるエリリ。

ヒロシ どないしてん。

エリリ あんな、あの人の事、何て呼んでたん？

ヒロシ そんなん覚えとらんわ。

エリリ そやけど今、“モモ”って言うてたよね。

ヒロシ さあ…、そう呼んでたかも知れんな。

エリリ でもあの人、名前で呼ばれた事ないって、あの…。

と、ヒロシを指すエリリ。

ヒロシ あいつの言う事なんかエエ加減な事ばっかしや。真に受けたらあかんで。

エリリ ……。

ヒロシ 全部嘘やで。気にすんな、な。

と、エリリの肩に触れるヒロシ。

ヒロシ 電話しようや。ちゃんと言うし。

エリリ でも…。

ヒロシ 迷惑か？ 俺の事。

と、エリリを見つめるヒロシ。

エリリは、首を横に振る。

ヒロシ エエねんな？

エリリ うん。

ヒロシ 俺、番号知らんねん。かけてくれるか？

エリリ うん。

と、エリリは、携帯電話を取り出し、かけるが、しばらくして、

エリリ 電源切ってるみたい。

ヒロシ そうか。

エリリ ……どうしよう……。

ヒロシ どうしたい？

エリリ 今日は帰ろかな。

ヒロシ もうちよつと居おったらエエやんけ。

エリリ ここに居おってもケイに悪いし。

ヒロシ、コウとメグミをチラと見て、

ヒロシ そやな。ほな、送るわ。

エリリ うん。

ヒロシ ケイには俺からちやんと言うどくし。

エリリ すいません。

ヒロシは、コウとメグミに向かって、

ヒロシ ここもう閉めるんで。

メグミ (立ち上がり) はい。行こか。

コウ え。

ヒロシ 鍵かけるわ。

コウ すいません。もうちよつとだけ居おらしてもらえませんか。

ヒロシ え。

メグミ あかんよ、そんな迷惑かけたら。

コウ もし出来たら、出来たらでいいんですけど少しお話もしたいんです。

メグミ あかんて。

ヒロシ 俺と？

コウ はい。

ヒロシ 何でやねん。

メグミ もう連れて帰りますから。な、コウ。

コウ お願いします。

ヒロシ お願いまでするか。

コウ はい。

ヒロシ 変な奴やな。

コウ すいません。

ヒロシは、フツと笑い、

ヒロシ そんなら居おれや。

コウ ……え。

ヒロシ 居ってもエエで。俺、どうせ単車置いてるし戻って来るわ。

コウは、反射的に、

コウ 何て？

ヒロシ え？

コウ 今、何て？

それを見て、メグミは慌てて、

メグミ コウ、良かったな。良かったやんか。

コウ ……え。

メグミ 良かったやん、居^おらしてもらえて。 (ヒロシに) ありがとうございます。

ヒロシ その変わりヤバ^{もん}い物^{もん}は出すなよ。

コウ ヤバい物って？

ヒロシ ピストルとか刃物とか薬とかな。

コウ (メグミを見て) 何て？

メグミ あ、大丈夫です。そうゆう物とはこの人縁がないんで。

ヒロシ 真面目に取るなや。顔見たら分かるがな。

メグミ すいません。

ヒロシ (エリリに) ほな行こか。

エリリ うん。

エリリ、コウとメグミに頭を下げ、

エリリ 失礼します。

メグミ 失礼します。

コウ さようなら。

エリリの肩に手を回すヒロシ。

そして、二人は出て行った。

メグミ なあ。

コウ ん。

メグミ 何でそんなにこだわんの、ここに。

コウ こだわるって？

メグミ その事から離れられへんって事。

コウ ああ…。分からへん。
メグミ 何かあんの？
コウ 分からへん。
メグミ 何かあるんやろな、そんだけこだわるって事は。
コウ メグミは？
メグミ え。
コウ メグミは何かない？ ここに。
メグミ 私？
コウ うん。
メグミ さあ、どうやろ。
コウ 何やねん、さあ、つて。
メグミ あるかも知れんし、ないかも知れん。
コウ どうゆう事や、それつて。
メグミ さあ。

と、メグミは、辺りを歩いて見て回る。

コウ なあ。
メグミ ん。
コウ 何でいつもそんな言い方すんねん。
メグミ そんな言い方？
コウ そうや。何か知ってるんか。
メグミ どうやろ。
コウ 何でそんなにじらすねん。
メグミ じらしてるか？ 私。
コウ 知ってたら教えてくれや。
メグミ 知らんで私は。なあーんにも。
コウ ホンマか？
メグミ ホンマホンマ。
コウ そうか…。
メグミ 鬱陶しいわ、あいつらも。
コウ あいつら？
メグミ うん。ここに居おった奴ら。
コウ エエ人やで、みんな。ここに居おらしてくれまし。
メグミ 鬱陶しい鬱陶しい。

その時、ケイが置いていった鞆に目を留めたコウは、それを手に取る。

コウ なあ。

メグミン。

コウ これって似てるなあ、メグミがいつも持つてるやつと。

メグミ そやな。

コウ 大きさも形もおんなじ位や。

メグミ 同じやで。

コウ え。

メグミ 同じや、全く。中身は違うけどな。

コウ 同じ？

メグミ うん。

メグミは、その空気を一杯に吸い、

メグミ ああー、懐かしい。ここ、小さい頃のまんまや。

コウ え……。

と、メグミを見るコウ。

暗転。

3.

夜のとばりが下りた倉庫。

ヒロシ、メグミ、コウの三人が、話している。

ヒロシ そんなん覚えとらんで。

コウ 覚えてない？

ヒロシ ああ、何遍も言うてるやろ。覚えとらんで、ガキの頃の事なんか。

メグミ (コウに) もうエエやん、な。この人もこう言うてはるし。

コウ ……そやけど。

メグミ そんなムキにならんとさ。

ヒロシ 何でそんなに知りたかねん、ガキの頃の事ばっかし。

コウ 何て言うたらエエか……。

メグミ (コウをかばうように) 興味あるんやんな。小さい頃の遊びとか生活とか、いろいろ。

ヒロシ おかしい奴やなあ。

メグミ よお言われます。

ヒロシ (コウに) どこに引っ越して来てん？

コウ え。

ヒロシ ちゃうんか？ 越して来たんと。

メグミ あ、商店街の向こうです。住宅街の。

ヒロシ 俺んとこと近いやんけ。(コウに) 普段は何してんねん。

メグミ 普段はほとんど家に居ます。この人、体が弱いもんで。
ヒロシ おい。
メグミ ……はい？

ヒロシは、コウを指さし、

ヒロシ 俺は、この人に聞いたんや。

メグミ ……すいません。

ヒロシ さつきからずっと代わりに答えとるやんけ。自分らどうゆう関係？

メグミ え。

ヒロシ あるやろ、夫婦とか恋人同士とかいろいろ。

メグミ 私ら、そんなと違います。

ヒロシ ほな、何やねん。

メグミ それは…。

その時、コウの顔が、輝いた。

コウ あの人やったら分かる。

メグミ 誰？ あの人って。

コウ あの人や。ケイさん。

ヒロシ ケイはもう帰ったで。

コウ 戻って来ますよ。

ヒロシ 戻って来るかいな。

コウ 戻って来ますよ、必ず。

メグミ (コウに) 約束でもしたん。

コウ 約束って？

メグミ ああ。(小声で) ここに戻って来るからねって二人で決める事。

コウ そんなんしてない。

ヒロシ ほな、何で分かんねん。

コウ うーん…、メスの直感かなあ。

ヒロシ は？

コウ そう、メスの直感ですよ。

ヒロシ それを言うならオスの直感やろが。

コウ オス？

メグミ (コウに) 男はオスって言うねん。

コウ へえー。でもじき戻って来ますよ。もうそこまで来てるし。

ヒロシ 大したメスの直感やな。

コウ ほら、戻って来た！

メグミ 何言うてんの。

コウ ホンマやって。

ヒロシ 付き合^おうてられんわ。

その時、ケイが、戻^{かえ}って来た。

コウ ほらね。(ケイに) ケイさん、僕待^{まち}ってたんですよ。ケイさんに聞^ききたい事あ^あつて。

ケイは知らん顔^{かま}で、メグミの鞆^{たもと}に直行^{ちゆく}する。

そしてそれを手にすると、再び出^でて行^いこうとするケイ。

コウ ちょっと待^{まち}ってください。

慌^{あわ}てたメグミは、さらに大きな声^{こゑ}で、

メグミ ちょっと待^{まち}ってください。

ケイは、歩^あみを止めない。

メグミ それ、私^{わたし}のです。

ケイ (振り返^{かえ}り) はあ？

メグミ それ、私^{わたし}のですけど。

ケイ 何^{なに}言^いうてんの。

メグミ 私^{わたし}のですよ。

ケイ 訳^{わけ}分からん奴^{やつ}やなあ。これは私^{わたし}の、あれ…。

と、鞆^{たもと}を振^ふったケイは、その中^{なか}身の音^ねに反^{はん}応^{おう}する。シャカシャカと鳴^なる中^{なか}身^み。

ケイ …何^{なに}や、この中^{なか}。

と、ケイは、蓋^{かぶた}を開^あけようとする。

メグミが、ケイの手^てから鞆^{たもと}を奪^{さら}い取^とる。

メグミ だから私^{わたし}のなんです。

ケイ …え…？

メグミ ケイさんのはあ^あつちですよ。

と、ケイの鞆^{たもと}を指^ささすメグミ。

ケイ、自分^{おれ}の鞆^{たもと}を拾^{ひろ}い上げ、振^ふつてみる。カチャカチャと鳴^なる中^{なか}身^み。

ケイ ホンマや…。(メグミを見^みて) ごめんな。

メグミ いいえ。形がよお似てるからしやーないですよ。

ケイは、自分の鞆を持って、メグミの傍に行く。
そして、二つを見比べながら、

ケイ ホンマ似てるなあ。

メグミ そうですね。

ケイ そやけどこれ、子供ん時のやで。（ヒロシを見て）この人が誕生日につてくれたやつやから。

メグミ ……私はよお分かりませんけど。

ケイ へえー。見れば見るほど似てるなあ。

コウ 似てるんとちゃうで。同じやねん。

ケイ え。

メグミ （慌てて）同じに見えるだけやって。

コウ メグミが言うたんやろ？ 全く同じって。

メグミ いややな、もお。

コウ （ケイに）ホンマですよ。中身は違うけど全く同じ鞆やって。

ケイ ……どうゆう事？

メグミ 偶然ですよ。あるじやないですか、たまたま同じ物持ってるって。

ケイ でも何で中身の事まで知ってるんの？

メグミ 中身なんて知りませんよ。

コウ （メグミに）なあ、偶然って？

メグミ たまたまって事。

コウ たまたまって？

メグミ たまたまはたまたまや。

コウ どうゆう事？

メグミ もおうるさいな。

コウ 分かんねんからしやーないやろ。

メグミ （苛ついて）ちよつとは黙っててよ。毎度毎度三才の子供みたいに聞かれたら鬱陶しいねん。

コウ ……ごめん。

その様子を見つめるケイとヒロシ。

メグミは、その視線を感じて、

メグミ いつつこんな調子なんです。私もある程度は答えようとしてはすけど、度重なるとつい…。

と、俯くメグミ。

間。

コウ、メグミの様子を見て、

コウ ……帰るか。

メグミ え…。もおエエの？

コウ うん。あんまり居おっても悪いし。

メグミ うん。(ケイとヒロシに) すいませんでした。ホンマにややこしい事ばっかし言うて。

ヒロシ エエで。

メグミ すいません。(コウに) ほな行こか。

コウ うん。

メグミ お邪魔しました。

コウ ありがとうございます。

と、去ろうとするメグミとコウ。

ケイ、二人に向かって、

ケイ コウさん、ホンマにエエの？

コウ (振り返り) え。

ケイ 何か私に聞きたい事あったんちゃうの？

コウ もおエエんです。すいません。

ケイ 私、付き合うで。コウさんが満足するまで付き合うで。

コウ でも…。

と、メグミを見るコウ。

メグミは、腹を決めたように、

メグミ ……エエよ。好きにし。

コウ、嬉しそうに、

コウ おお。(ケイに) ホンマにイイですか？

ケイ うん。

コウ 良かった…。

ヒロシ そつか…。ほな俺は何か買こうて来るか。何がエエ？

ケイ 何買いに行くん？

ヒロシ 食もんう物、飲もんむ物、そんなとこやな。

ケイ どこまで行く？

ヒロシ コンビニ。

ケイ ほな私、サンドイッチとコーヒー。

ヒロシ そちらさんは？

メグミ コンビニって駅前まで行くんですか？

ヒロシ ああ。

メグミ そんなんイイです。ここからだいぶあるし居おってください。

ヒロシ かまへんかまへん。俺も何か欲しいし、単車でひとつ走りやから早いもんや。

コウの顔が強張り、大きな声で、

コウ 今、何て？

ヒロシ 単車でひとつ走りって、

コウ (遮って) あかん！ 単車はあかん！

ヒロシ はあ？

コウ 単車は絶対あかん！ 単車は危ない！

メグミ コウ。

コウ 単車はあかん！ 単車はあかんねん！

メグミ (コウを抱きしめ) コウ！ 落ち着いて。

ケイ どないしたん？

コウ 単車は絶対あかん！

メグミ (ヒロシに) すいません。行くの止やめるって言うてやってください。

ヒロシ 分かった分かった。行くの止める。

コウ 単車はあかんねん！

ヒロシ おい。ここに居おるから落ち着けや。

コウ ……ホンマですか。

ヒロシ ホンマやホンマや。

コウ ……。

肩で息をしているコウ。

メグミは、コウからようやく離れる。

が、なおもコウの背中をさすっているメグミ。

ヒロシ (メグミに) 大変やな、あんたも。

メグミ ……はい。

ヒロシ 毎度こんな調子か？

メグミ この人、単車には過剰に反応するもんで…。

ケイ 何かあんの？

メグミ 前に事故してるんです。

ケイ そうなんや。
メグミ はい。
ヒロシ へえ…。

メグミ、コウの帽子をそつと取る。

メグミ (コウの頭を触り) ここ。今はだいぶ髪の毛伸びて見えにくくなったけど。

ケイ、コウの頭を覗き込み、

ケイ わあー、すごい傷。

ヒロシ (ケイに) そんなん見るなや。

ケイ すごいで。大きくこおー切つてある。

ヒロシ ケイ! 失礼やろ。

ケイ あ…、ごめん。

コウ かまへんよ。ホンマの事やし。

と、帽子をかぶるコウ。

メグミ これでも綺麗に治った方なんです。

ケイ へえー。

メグミ 事故したつて聞いて病院に駆け付けた時、この人見てびっくりしました。

ケイ どないしたん?

メグミ 体中、包帯だらけでベッドに寝てたんです…。普通、頭って丸いでしょう。それやのに、ここ、ベコンつてえぐれてて…。包帯の上からでも分かるんです。ゆるーくカーブしてた骨が砕けてベコンつて…。

ケイ ちゃんとまああるいやん。

メグミ 今はね。あの、傷が落ち着いてから、これ位の人工の骨入れたから。また手術して。

ケイ 人工の骨…。

ヒロシ もお怖いから止めてくれや。

メグミ すいません。

ケイ でも元通りになつて良かったなあ。不幸中の幸いや。

メグミ 元通り?

ケイ うん。

メグミ そう見えます?

ケイ うん、見える見える。命に別状無い訳やし。

メグミ (コウに) 良かったな。そう見えるつて。

コウ ……うん。

と、コウは、元気なく頷く。

ケイ ……まだ何かあるん？
メグミ まあ、生きてるだけでも幸せですから。ね。

と、小さく笑って、コウを見るメグミ。

コウ ……。

メグミは、コウに触れ、

メグミ はい、やろ。

コウ ……え。

メグミ こうゆう時は笑って“はい”って言うんやっていつも言うてるやないの。

コウ (少し笑って) ……はい。

メグミ そうそう。

コウ ……なあ。

メグミ ん。

コウ ……“はい”って何？

メグミ 僕もそう思いますって事。

コウ そう思います、って？

メグミ え？

コウ 何をそう思うの？

メグミ 何言うてんの。

コウ なあ、何をそう思う訳？ 何を思ったらエエ訳？

メグミ そこまで考えなくてもエエの。笑って“はい”だけ言うてたらエエねん。なんぼ考えてもどうせ分からへんねんから、な。

コウ ……そうか…。

メグミ そうや。

ケイ、ためらいがちに、

ケイ なあ…。

メグミ はい。

ケイ こんな事、聞いてエエかどうか分からんけど。

メグミ どうぞ。

ケイ コウさん、事故でどないかしたん？

顔を見合わせるメグミとコウ。

ケイ、それを見て、

ケイ あ、エエわ、やっぱり。…ごめん。

間。

コウが、ポツリポツリと口を開く。

コウ よお分からんのです。

ケイ よお分からん？

コウ はい。

ケイ 分からんって、何が？

コウ あの…、僕も何かしてたんでしようか。そんな時より前に。

ケイ はあ？

コウ ケイさん、僕にも小さい時ってあったんでしようか。

ケイ え？

コウ 僕にも小さい時って…。

ケイ そりゃあるやろ、誰かて。

コウ ケイさんもありました？ 小さい時。

ケイ あったで。

コウ 何してました？

ケイ 何って、よおここで遊んでたって言うたやん。

コウ ああ、ヒロシさんと。

ケイ うん。

コウ 覚えてます？ そんな時、何したか。

ケイ うん。いろいろしたで。

コウ どんな事？

ケイ えーっと…。

コウ 教えてください。

ケイは、一つ一つ思い出すように、

ケイ ここな、砂袋が一杯あったんやんか。そやから砂がこぼれて砂場みたいやってん。

コウ 砂場…。

ケイ うん。その砂にな、よお小さい貝殻が混じってて綺麗な貝殻探した方が勝ちとか、ビー玉やボタン隠して宝探とか、いろいろやな。あと、砂山やお城も作ったわ。ああ、そこでほら、さっきやったやん。「おちやらか」とか、「アルプス一万尺」とか、そんなんもよおしたな。

コウ へえ…。

ケイ 二人のお気に入りの遊びはな、何やと思う？

コウ 何ですか？

ケイ 「砂漠ごっこ」。

コウ 砂漠ごっこ？

ケイ うん。私もホンマにそうなんかどうかは知らんけどな、どこまで行っても、ズーっと砂だけやねんて、砂漠って。

コウ へえ…。

ケイ そこに私ら二人で居る事にすんねん。ズーっと砂しかないところに二人だけ。そんで何が見えるか、何が出来るか、どんな生活するか、全部想像して遊ぶねん、暗くなるまで。（ヒロシを見て）なあ。

ヒロシは、知らん顔。

ケイ なあって。

ヒロシ 覚えとらんて、ガキの頃の事なんか。

ケイ （コウに）一遍な、ホンマの砂漠にしよってこの砂袋ゼーんぶ破いて砂出した事あったんやんか。ゼーんぶやで。そしたらここが一面、砂だらけになつてなあ。どこまで行っても、どこまで行っても、ズーっと砂だけやねん。すごかったでえ…。ホンマの砂漠やった。

コウ 砂漠…。

ヒロシ （ケイに）そのおかげでえらい怒られたやんけ。オカンとじいさんにな。

ケイ 覚えてるやんか、ガキの頃の事。

ヒロシ 覚えてるんちやうわ。イヤな事は頭やなくて体に染み付いとんや。なんぼゴシゴシ洗ても消えへんねん。

ケイ エエ思い出やんか。オカンとじいさんに怒られた事は。

ヒロシ どこがエエ思い出じゃ。

ケイ エエ思い出や。今は怒ってくれる身内も居らんねんから。

ヒロシ 清々するわ。

ケイ 清々する？

ヒロシ ああ。鬱陶しいやんけ、血でつながってるって。

ケイ 何が鬱陶しいや。

ヒロシ つながってるのは“血”だけや。他には何もつながつとらん。出来たら最後の血も断ち切りたいわ。

ケイ、ヒロシをキツと睨む。

が、すぐに開き直ったように、

ケイ ま、そんなもんやな、血のつながりなんて。傍に居ると鬱陶しい。

ヒロシ 分かって来たな、おまえも。

ケイ そやけど何かあつてみい。アンタの面倒見んの私しか居らんねんで。

ヒロシ そうなったら頼むからほっといてくれ。おまえに最後の血の一滴まで吸い尽くされるの御免やからな。

ケイ その方がエエやん。血い吸い尽くしたら血のつながりも無くなるで。
ヒロシ それでも骨でつながろうとするやろが、おまえやったら。

ケイ、少し笑い、

ケイ 今度は骨のつながりか。

ヒロシ ああ。

ケイ 結局、断ち切られへん訳や。

コウ、メグミを見て、

コウ ……骨のつながり。

メグミ ……何言うてんの。

と、言い激むメグミ。

ヒロシ まあ、骨も粉々に砕けたら切れるかも知れんな、つながりが。

ケイ 無理や。

ヒロシ 何が無理やねん。

ケイ ちよつとやそつとで切れるかいな。小さい頃からの積み重ねがある以上。

ヒロシ また小さい頃か。

ケイ そうや。同じ親で、同じ物食べて、同じ時間過すごして、同じ記憶で、全部同じなんやから。

ヒロシ 何が同じや。

ケイ 同じやないの。

ヒロシ おまえは同じと思っててもやな、所詮、俺とおまえは覚えてる事がちやうんじや。

ケイ 覚えてる事がちやう？

ヒロシ ああ。誰でも自分とおんなじ事をおんなじ風に覚えてる思たら大間違いやで。たとえおんなじ時を過すごしてもや、覚えてる事なんか一人一人全くちやうんやからな。甘い期待すんな。

ケイ ……何が甘い期待よ。

ヒロシ、ケイをじっと見て、

ヒロシ ほな、ガキの頃に兄弟で怒られたらどっちがダメージ大きいか言うてみい。

ケイ 一緒やないの、そんなん。

ヒロシ は。だから下は幸せやねん。

ケイ 何でよ。

ヒロシ おまえの記憶ん中では兄妹きょうだい同じ取り扱いや。そやけど俺の記憶ん中では確実もんに上の者の

方がダメージ大やねん。大人はいつつも理不尽に押し付けよる。上の者に集中的にな。分かるか？

ケイ ……そんな。

ヒロシ な。生まれた時から俺が上や。始まりがちゃう以上、全部違て当然やろが。俺とおまえとでは同じ物なんかなーんにも無い訳や。それやのにいつまでも妹面下げて擦り寄られてみい。鬱陶しい以外の何物でもないやんけ。

じつと、ヒロシを見つめているケイ。

ヒロシ もうエエ加減、一人で立てや。おまえもしんどいやろが、突き放されてばっかしやと。

ケイは、ハツとする。

ケイ ……アンタ…。

ヒロシ 何やねん。

ケイ わざとしてたん？ ……今までずっと。

ヒロシ ほっとけ。

ケイ ……そっか。

二人を見つめたまま、じつと聞いているコウ。

そんなコウを見つめているメグミ。

ケイのバッグからは、中身がバラバラとこぼれ落ちて行く。

それと同時に、サラサラと降り始める砂の粒…。

ヒロシは、コウを見て、

ヒロシ こんな物やで、ガキの頃の事なんか。

コウ ……はい。

ヒロシ あつても無くてもおんなじや。

コウ おんなじでしょうか？

ヒロシ 少なくとも俺は要らんな。

コウは、少し考えた末、

コウ でも、ヒロシさん。

ヒロシ 何や。

コウ 小さい頃があるから今があるんやないんですか？

ヒロシ 今？

コウ はい。つながってるんでしよう、今と小さい頃って。

ヒロシ 関係ないで。俺はいつとも今の俺や。

コウ 嘘や、そんなん。

ヒロシ 何で嘘やねん。

コウ だって小さい頃が無かったら分からないやないですか。自分がこの世に居たんか、居なかつたんか。自分が何して来たんか、自分が誰なんか、何も分からないやないですか。

ヒロシ ムキになんや。そんなに欲しかったらやるで、俺の過去ぜーんぶ。

コウ、ヒロシから視線を外し、

コウ ……それが出来たらそうしますよ。

ヒロシ そやる。出来へんねん、人の昔話聞いたところで何一つな。そやから自分も終しまいにしろや。ガキの頃の事にこだわるのは。

コウ そう思いますか？

ヒロシ ああ。下手の考え休むに似たりって言うやろ。

コウ え？

ヒロシ しょーもない事考える位やったら何か食うて何か飲んどけ言う事や。

コウ ……はあ。

ヒロシ 俺、コンビニ行つて来るわ。

と、ヒロシは、出て行った。

暫くして、単車のエンジンをかける音が聞こえる。

慌てて、コウの耳を塞ぐメグミ。

コウ 何？

メグミ ……。

コウ 何やねん。

メグミ ……。

ただメグミは、力一杯、コウの耳を塞いでいる。

コウも、されるがままにしていた。

やがて遠のいて行く単車の音。

メグミは、コウから手を放し、

メグミ ……なあ。

コウ ん。

メグミ 何かあった？

コウ 何かって？

メグミ 何か“これ”って思うような事。さっきの話聞いて。

コウ …… ああ。

メグミ 何？

コウ …… よお分からん。 …… そやけど（胸に手を当て）ここらへんが、（頭に手を当て）ここらへんが、何か、グワーってしてる…。

メグミ そうなん？

コウ うん。砂場…、宝探し…、「おちゃらか」…、何かグワーって。

ケイ さっきやったやん、「おちゃらか」は。

メグミ あれは覚えてたんですよ、何でか。

コウ、メグミを見て、

コウ なあ。

メグミ ん。

コウ これって映画の事？ それともホンマの事？

ケイ はあ？

メグミ よお混乱するんです、この人。あの…、事故から前の事は覚えてないんですけどね、時々、断片的には出て来るみたいなんです。言葉とか、情景とか、歌とか、何やかんやと。そやけど出てきたところでのただのジグソーパズルですよ。あっちこちピースの抜けたジグソーパズル。所々は埋まっても、あちこちのピースが抜けてるから全体の絵が何なのか分からへん。つながらないんです。そのピースが映画で観た物なんか、現実やった物なんか、それも分からないうんです。

ケイ …… そうなんや。

メグミ はい。

ケイは、コウに近寄り、

ケイ 映画よお観るの？

コウ はい、家で。

ケイ 家で？

コウ はい。

ケイ それってビデオやんか。

コウ ビデオ？

ケイ 映画は映画館で観るから、

メグミ （遮って）人混みには連れて行った事ないんです、この人。

ケイ あ…、そうなん。

メグミ はい。そやからビデオが映画です。

ケイ ほな、ずっと家に居おんの？

コウ ちゃんと外にも行きますよ。毎日、公園に。

ケイ 公園？

コウ はい。滑り台のある公園。

ケイ 他には？

コウ 他には緑色の草がはえてて、

ケイ (遮って) 他にはどこ行くん？

コウ 他に行くところあるんですか？

ケイ リハビリとか、病院とか、そんなんに行くやろ？

メグミ いいえ、公園だけです。家の中が一番安全ですから。あんましょそ行くと危ないし。

ケイ 私は必要やと思うけど。コウさんにはそれが。

メグミ そうですか？

ケイ うん。少しずついろんな刺激受けてるうちに記憶かてつながるかも知れんで。

メグミ いいんです。記憶なんかなくても。

ケイ 何で？

メグミ 要りますか？ 記憶なんて。

ケイ そりゃ要るやろ。過去が今につながってるんやし。

メグミ 過去？

ケイ そうや。

メグミ 過去なんか関係ないですよ。今だけあれば十分じゃないですか。

ケイ 今だけ？

メグミ はい、今だけ。

ケイ 何で今だけで十分なんよ。

メグミは、ケイを正面から見据えて、

メグミ ほな、ケイさんの記憶は完璧ですか？

ケイ どうゆう事、完璧って。

メグミ 完全に、あつたままを、全て覚えてるって事ですよ。

ケイ そんな事ある訳ないやんか。

メグミ でしょ。

ケイ ……何よ。

メグミ 人間の記憶なんてそんな物もんですよ。実際にあつた事より忘れてる事の方がずっと多いんやから。かろうじて覚えてる事やって、自分に都合のいい事を、都合のいいように覚えてるだけやないですか。事実からは程遠いんです。結局、人間なんてみんなある種の記憶喪失者ですよ。それやったらそんな物もん、必要ないでしょう。

ケイ ……まあ、そう言われればそうやけど……。

メグミ (コウに) な、そやからお考えんでエエねん。自分が小さい時どうやったかとか、その後、何して来たかとか、そんなしょーもない事。そんなん考えたらしんどいだけやろ？
コウ ……うん。

ケイ、少し離れて、二人を見て、

ケイ 猫と飼い主やな。

メグミ え。

ケイ 猫と飼い主。コウさんと言う猫と、それに悪い虫が付かんよう家で囲ってる飼い主。二人だけの世界や。

コウ ……二人だけの…世界。

ケイ うん。そこからはどこにも広がれへんねん。せまーい世界に二人つきりや。そりゃ居心地エエよな。両方がそこだけを見てたらエエねんから。そこには昔もこれからも無いねん。今だけの世界や。今だけ寄り添って、今がずーっと続くねん。でも猫には外の世界は見せたらあかんで。外の面白さを知ってしもたら家に寄り付かなくなるからな。飼い主の自己満足が壊れてまう。

メグミ ……自己満足？

ケイ そうや。それともイジメかな。猫の一生をつまらん物にするための。

コウ イジメ…。

メグミ ……。

コウ ……そうなん…？

と、メグミを見るコウ。

メグミ、そのコウの視線を受け、

メグミ ……変な事、言わんといってください。

ケイ (コウに) もつとあるはずやで。コウさんには、もつと別の世界が。

コウ (メグミに) なあ、どうゆう事なん？

メグミ 考えんでエエって言うてるやろ。

ケイ (コウに) な、こう言うてる事が既にイジメやで。コウさんはただの飼い猫や。

コウ (メグミに) なあ、ちゃんと教えてくれや。

ケイ (コウに) きつと可愛がられてるんやろな、この人に。真綿で首を絞めるみたいにジワジワと。キスカてどこにしてもエエけど唇だけは絶対許せへん、とかな。

コウ ……え。

ケイ 凶星か。やりそうな事やな。

メグミは、ケイを睨み付けて、

メグミ そうしたいのはアンタやろ！

ケイ え？

メグミ 自分がそうしたいから出て来るんやろが。そんな言葉がツラツラとな。

ケイ 何言うてるか分からんわ。

メグミ 分かる時がじき来るわ！

ケイ、メグミの傍に近寄り、

ケイ アンタ、窒息寸前やな。

メグミ え…。

ケイ コウさんの首絞めながら、自分の首も絞めてる感じや。

と、メグミを見つめるケイ。

メグミは、ケイをただ見つめていた。

ケイ、コウの肩に触れ、

ケイ 落ち着いて思い出してみ。今まで私にはいろんな事があったで。そやからコウさんにかけて
いろんな事があつたはずや。

と、ケイは、出て行く。

コウ ……いろんな事…。

コウの記憶が、さかのぼ遡る。

モモが、砂山の上からコウを呼ぶ。

モモ なあ、こつち来てみ。

コウ ……え。

モモ 砂場って格好の遊び場やで、猫にとっては。

コウ 猫。

モモ うん。一緒にじゃれて、一緒に遊ぼうや。

コウ 僕と？

モモ 当たり前やん。私、好きやねん。「あつたかい」って言われるの。

コウ ……あつたかい…。

モモ な、猫丸。

入り口では、エリリがコウを呼ぶ。

エリリ なあ、こつち見て。

コウ ……え。

エリリ あんな、ケイやっぱり怒ってんねん。

コウ やっぱりって…？

エリリ 口もきいてくれへん。どうしたらエエンやろ。

コウ ……そうなん…？

エリリ うん。…でも私、ちょっとショックやったな…。
コウ 何が。

エリリ あの人が言うた通りやったから、百恵さんが。
コウ 百恵さん？

エリリ うん。…「あったかい」って。
コウ え。

と、辺りを見回すコウ。

コウ ……どうゆう事や…。どうゆう事やねん…。

と、辺りを探って行くコウ。

コウ 何でやねん！

コウは、頭を抱えてうずくまる。

その姿を、黙って見守っているメグミ…。

単車が、激しくぶつかった音が聞こえた。

その後は、静寂の中に、ただ砂が降る音…。

メグミは、鞆を持ったまま、コウの傍に近寄る。

メグミの腕に支えられ、立ち上がるコウ。

コウ ……何。

メグミ ちよつとこつち。

と、コウを砂山に導くメグミ。

コウは、黙ってメグミに従う。

砂山に着くと、メグミはそこに座る。

そして鞆を開けると、砂山の上に、その中身を落とすメグミ。
中からは、サラサラと白い砂状の物がこぼれ落ちた。

コウ それって…。

メグミ 可哀想な事したな。

コウ ……ああ。

メグミ ここに返してあげよう。

コウ ここに？

メグミ うん。ここが一番エエから。

コウ ……そうか…。

メグミ ……うん。

コウもそこに座り、砂を撫でる。

コウ こいつも何の記憶もないままなかな。

メグミ ……そうやな。

コウ 帰って行くんや、ここに。

メグミ ……うん。

と、二人は、その砂をはさむようにして座っている。

砂を見つめるメグミ。

コウは、遠くを見ている。

コウ どこまでも砂か…。

メグミも、顔を上げ、遠くを見る。

メグミ うん。

コウの記憶が、少しずつ、少しずつつながっていく。

コウ ……ゆるーくカーブしとる。

メグミ 何が。

コウ ……あの、ずーっと先のライン。

メグミ うん。

コウ 地平線や。

メグミ ……地平線か。

コウ ああ…。水平線ではないやろ。

メグミ 水平線？

コウ 少なくとも海ではない。

メグミ 海…。溺れてもがく海の底。

コウ 山でもない。

メグミ 連絡途絶えた遭難現場。

コウ 沼地でもない。

メグミ 足を取られて底なし沼。

コウ 雪原せっげんでもない。

メグミ 雪崩なだれに飲まれて虫の息。

コウ 樹海でもない。

メグミ ロープにかかった白骨死体。

コウ 砂漠か…？

メグミ オアシス求める骸骨達。

コウ ……砂漠か。

メグミ 彷徨^{さまよ}い疲れてただの骨。

コウ 砂漠か、ここは。

メグミ 骨は碎けて砂となる。

コウ なあ。

メグミ 絡み絡まれ蜃気楼。

コウ メグミ！

メグミ 倉庫やで、ここは。

と、コウを見つめるメグミ。

メグミ キスして。

コウ ……ああ。

と、メグミの首筋に唇を近付けるコウ。

メグミは、少し離れ、

メグミ ちやう。

コウ 何が。

メグミ ちゃんとして欲しいねん。

コウ ちゃんと？

メグミ うん。ちゃんと唇につて事。

コウ え。

メグミ 何。

コウ そやけど…。

メグミ 何よ。

コウ 今まで唇だけは絶対あかんつてさせてくれんかったやろ。

メグミ エエねん、今日は。

コウ 何で。

メグミ 最初で最後の事やから。

コウ 最初で最後？

メグミ そう。全部、映画の中の事やねん。今までの事は全部な。

コウ ……そうなん？

メグミ うん。自分の事も、人の事も、過ぎてしもた事は全部映画のワンシーンと同じやねん。

そんだけの物^{もん}やねん。

コウ ……そうか。

メグミ もう終わりにするわ。砂漠の蜃気楼は。

と、コウの肩を愛しそうに抱くメグミ。

コウ ……分かった。

遠くを見つめているコウ。

メグミ、コウを見つめ、

メグミ キスしてよ。

コウ うん。

コウは、メグミを見つめる。

メグミ ……もうアンタのあの言葉聞く事もないわ。

コウ あの言葉って？

メグミ ……あったかい……。

二人の距離が、少しずつ縮まって行く。

砂の降る音だけが、聞こえていた。

溶暗。

《幕》